

Web2.0時代の核データサービス

Web Service of Nuclear Reaction Data in the Web 2.0 Era

北星学園大学経済学部
片山 敏之

KATAYAMA Toshiyuki
Hokusei Gakuen University, School of Economics

この年報の巻頭言では、繰り返し、NRDFまたはJCPRGの発展の経緯や、現在の活動内容の分析、および今後の見通しが、力強く語られてきている。今回はじめてこの欄に寄稿することになって、さて、関係者として何を加えることがあるか考えがまとまらず困ってしまった。私とNRDFとの関わりは随分長い、本格的には1982年頃、当時北海道大学大型計算機センターの千葉正喜氏と共同で取り組んだ「荷電粒子核反応データベースのデータコンパイラの開発」がきっかけである。これは国内の核データベースであるNRDFを、IAEAの国際的核データベースEXFORに変換するプログラムの開発であり、現在の入力編集システムHENDELの開発の2001年まで使われていた。1987年からはNRDFの管理運営委員会の一員として深く関わると共に、私大の経営情報学科で、データベース管理システムを情報科学の分野から教育と研究を行っている¹。

現在のNRDFおよび周辺システムはほとんどWWW（通称Web）対応のWebアプリケーションに移行している。システムを開発し、運用する側には高価な計算機システムが不可欠ではなくなった。核データも、インターネットに接続できる環境にあれば、誰でもどこからでも利用できるようになった。最近のシステム開発によるNRDF周辺システムの機能の充実が核データ分野では注目されており、研究対象者への知名度が浸透した分、特に海外からの利用が可能になった分、利用者は確実に増えている。しかしながら、核データNRDFの利用者のアクセス件数が、年々顕著に増加しつつあるという話はあまり聞かない。この状況を飛躍的に変えるための1つの提案をしてみたい。

いま、ビジネス分野ではWebアプリケーションによる情報発信のあり様が、Web2.0と呼ばれるWebサービスの形態に変化しつつある。従来は、便利なポータルサイト²やブックマークからあらかじめ登録されたURLへのリンクを選ぶか、または、Googleのような検索サイトから検索し、目的のWebページを読みに行くという利用が一般的であった。Web2.0では³、Webサイト事業者が準備したWebアプリケーションやコンテンツを、利用者がただ受身で使うだけでなく、多くの利用者が参加し情報発信しあう形でWebサービスが形成される。利用者がWebサービスの一部に組み込まれていることが、そして情報を自己制御できることが、従来のWebサービスとの基本的な違いである。

Web2.0サービスの先行例は、各種のブログ（Weblog）、Wikipedia、Amazonのブックレビュー、GoogleのAdSenseなどである。現在は、一般の検索サイト、ソーシャルブックマークなどのSNS

¹大学での就職出張で、年に2回ほど大学の情報化・教育の情報化戦略をテーマとする研究集会に参加する機会があるのだが、そこでの先進的な事例紹介や企業展示会で新しい動向を知ることが多い。

²研究者にとってはYahoo!や楽天市場など以外にも、大学や研究所のWebサイトの中にもポータルサイトがある。

³Tim O'Reilly, "What Is Web2.0" (2005/9/30)と題するWebページ; 邦訳はCNET Japanにある<http://japan.cnet.com/column/web20/story/>

(Social Network Service)、メールやニュース配信やオークションなどの「欲しい物・お勧めリスト」にも Web2.0 が普及している。そしてそこでの基本的な技術は、XML (HTML の意味情報を記述するプログラム言語) で整理されたデータファイルを Web に組み込む技術の一種で、RSS⁴ とその発展としての Atom や、リッチクライアントを記述する REST⁵ や Ajax⁶ などと呼ばれる技術群である。

核データの Web サイトへの訪問者を増やすには、従来のように「待ち」の姿勢ではダメであり、利用者のブログやブックマーク等の「口コミ」を活用する必要がある。その為に Web2.0 の技術を取り入れてみようというのが 1 つの提案である。例えば、RSS はブログサイトの更新情報やニュースサイトの最新記事について、ページ単位ではなく小項目や記事単位の見出しや要約の情報を配信できる。核データの更新情報を RSS のデータ形式 (RSS フィード) でも提供すれば、この Web サイトに関心のある訪問者は自分の Web ページにその RSS フィードを一度登録するだけで、瞬時に更新状況を知ることが可能になる。最近では、RSS フィードを専用に検索する検索サイト⁷ が増えているので、不特定多数の人にも更新情報を提供することができる。一般の検索サイトでは目的の情報を効率よく見つけることが簡単ではなくなっているため、今後は RSS を利用する人は拡大するであろう。

ここで重要なのは核データを提供する側、管理運営委員会の委員とシステム作成者、我々にある。データ採録の方針やデータチェック、データ更新のお知らせはメーリングリストや掲示板で行うのではなく、各自の Web ページ (RSS 付のブログ的にする) または SNS を構築してそこで行うようにすることである。我々の間での議論の中で紹介・公開してもかまわない記事等を我々自身も RSS リーダで見ることができるようにする。口コミの輪を我々の外側の訪問者にも広げるためには、コンテンツには質的に高いデザインが求められるが、Web2.0 の技術はそれを非常に容易にしてくれると言われている。

まずは我々自身がメリットを感じる形で付加データが蓄積され、蓄積された付加データと他の利用者の要望からサービスも更に進化していくことを期待する。利用者に特定の使い方を強いるのではなく、利用者主体によるユニークなコミュニティ作りが Web2.0 の考え方の基本にある。

⁴RSS の登場は 1999 年 3 月、Ben Hammersley 著、”Web 開発者のための RSS&Atom フィード”, O'REILLY ジャパン (2005 年 9 月刊) による。

⁵REST は XML over HTTP と呼ばれ、XML に XSLT スタイルシートを使って XML を HTML に変換し、タグの意味情報を記述する。

⁶Ajax の登場は 2005 年 2 月、先駆的な利用例は、Google Map や Google Personalized Homepage など。JavaScript による非同期通信と XML を使う周知の技術の組み合わせで、一般の SNS や Web メールにも急速に普及した。企業の活力を高める知識創造・知識管理の手法として SNS をコラボレーションウェアとして利用する製品もある。

⁷テクノラティ (technorati.jp)、feedster.com、bulkfeeds.net、など